沖代地区条里跡原田地区
大悟法地区条里跡堀田地区
中津城本丸南西石垣

2001年度　中津地区遺跡群発掘調査概報(XIV)

中津市文化財調査報告　第27集

2002

中津市教育委員会

中津城本丸南西石垣

本丸南西石垣天端面遺構検出状況

例　言

一、本書は中津市教育委員会が2001年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概報である。

一、調査は2001年度国宝重要文化財等保存整備事業費及び2001年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。

一、調査団の構成は下記のとおりである。

一、調査主体　中津市教育委員会
調査責任者　武吉　勝也（中津市教育委員会教育長）
調査事務　尾畑　豊彦（中津市教育委員会市民文化センター館長）
田中布由彦（同　係長）
富田　修司（同　主任）
調査員　渋谷　忠章（大分県教育庁文化課課長補佐）
小林　昭彦（同　副主幹）
小柳　和宏（同　主査）
調査担当　高崎　章子（中津市教育委員会市民文化センター主査）
花崎　徹（同　主任）

上記のほか、北垣聰一郎氏（奈良県立橿原考古学研究所研究員）、髙瀬哲郎氏（佐賀県立名護屋城博物館学芸課長）、後藤宗俊氏（別府大学文学部部長兼教授）、豊田寛三氏（大分大学教育福祉科学部教授）、梅崎恵司氏（北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室学芸員）に現場にて御助言、御指導を頂いた。厚く御礼申し上げます。

一、本書の執筆、編集は第1章、第2章、第3章を花崎が、第4章を高崎が行った。

一、写真撮影は、高崎、花崎が行った。
巻頭カラー「中津城本丸南西石垣」は麻川尚良氏に撮影していただいた。

一、本書を作成するにあたり金丸孝子(中津市歴史民俗資料館)の協力を得た。

一、現場作業は下記の皆さんの協力による。
辛島雅美、新田秀勝、速水善朗、山縣信夫、石塔美代子、辛嶋万里子、辛嶋芳卿、川端和樹、佐藤秀治、末松孝道、谷口幸代、西田繁美、宮永光美、安永敬治、中村清博、野口一夫、下村和好、井上英子、阿部恵子、瀬口礼子、島津真澄、冨部智子、中村恵美子、中島裕子、田原文子、江藤清子、松本　勲、上川幸枝、清永洋美、塩谷絹子、松村たか子、松永理恵、穴井美保子、岩本敏美、佐藤智子、中村香代子、田中トミ子

目　　次

第１章　地理と歴史的環境 …… 1

第２章　沖代地区条里跡原田地区 …… 2

１．調査に至る経緯 …… 2

２．調査の概要 …… 3

３．小　結 …… 4

第３章　大悟法地区条里跡堀田地区 …… 5

１．調査に至る経緯 …… 5

２．調査の概要 …… 6

３．小　結 …… 6

第４章　中津城本丸南西石垣 …… 7

１．中津築城の歴史 …… 7

２．中津城の現況 …… 8

３．調査に至る経緯 …… 10

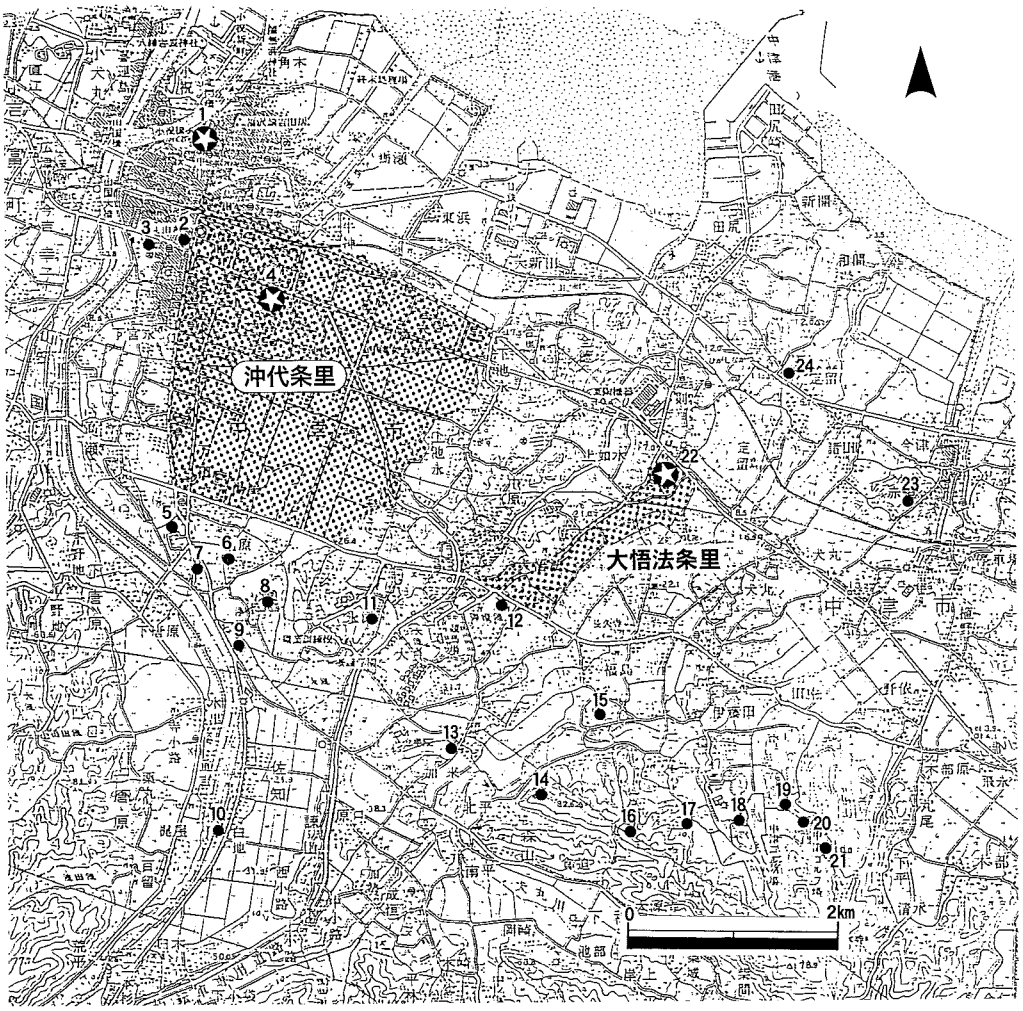
４．調査の概要 …… 11

５．まとめ …… 16

図版１　沖代地区条里跡原田地区…… 17

図版２　大悟法地区条里跡堀田地区…… 18

第1章　地理と歴史的環境

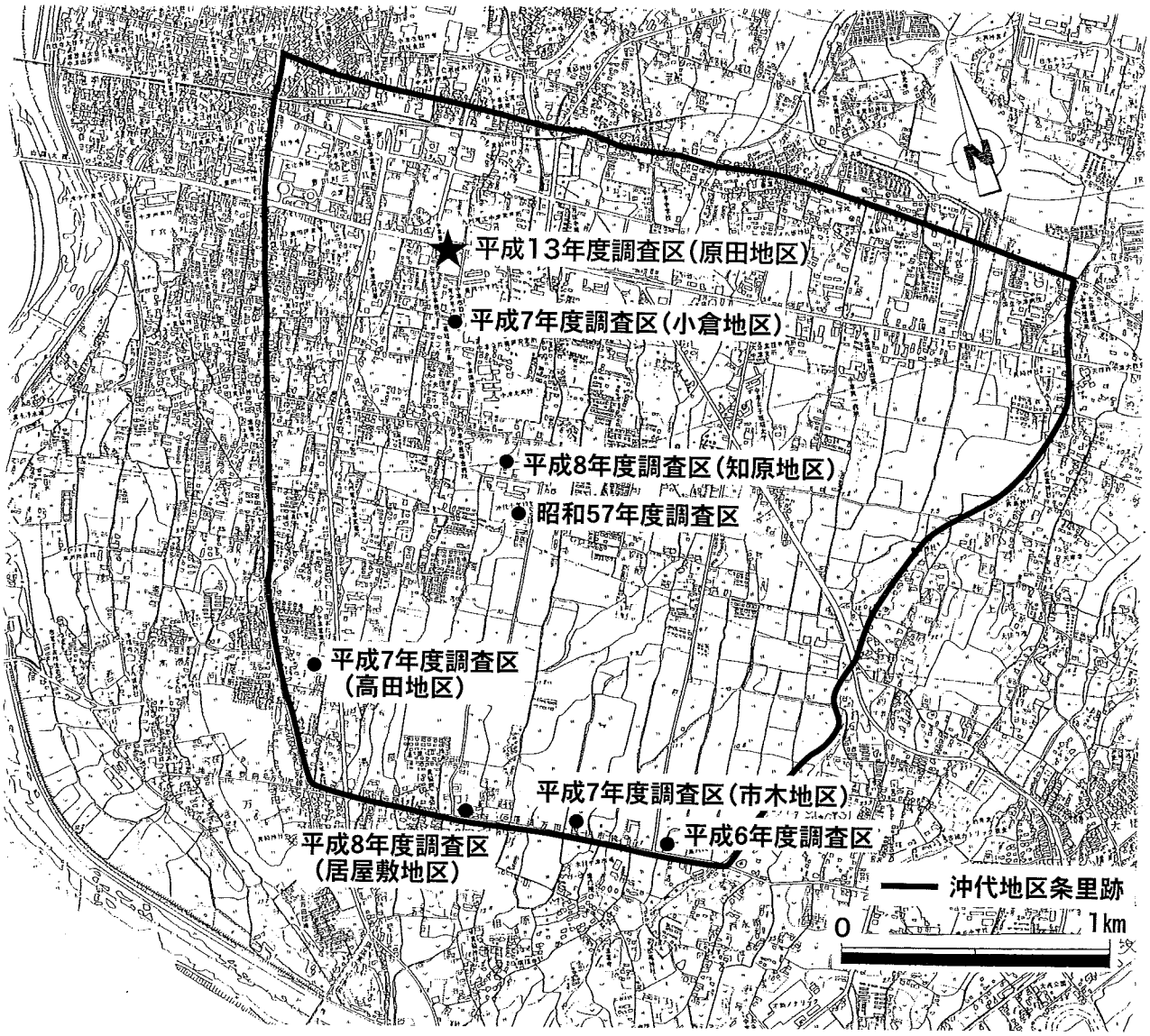


1．中津城
2．豊田小学校遺跡
3．高畑遺跡
4．沖代地区条里跡
原田地区
5．上万田遺跡
6．相原廃寺
7．三口遺跡
8．相原山首遺跡
9．弊旗邸古墳
10．百留横穴墓群
11．長者屋敷遺跡
12．薦神社
13．大坪遺跡
14．森山遺跡
15．福島遺跡
16．洞ノ上窯跡
17．才木遺跡
18．伊藤田城山窯跡
19．夜鳴窯跡
20．踊ヶ迫窯跡
21．ホヤ池窯跡
22．大悟法地区条里跡
堀田地区
23．赤迫東遺跡
24．定留遺跡

第1図　中津地方遺跡分布図

中津市は大分県の北部に位置し、人口約67,300人、市域面積55,67㎢を有する。地形は起伏の少ない平坦なものである。洪積台地が中央に、西部に沖積平野が広がる。ここで中津の主要遺跡を概観してみる。旧石器時代の遺跡は発掘例が少なく多くを語る資料がない。17の才木遺跡があげられる。縄文時代の遺跡は3の高畑遺跡、入垣貝塚、棒垣遺跡などがあげられる。弥生時代の遺跡は14の森山遺跡、15の福島遺跡などがあげられる。縄文時代、弥生時代の遺跡の多くは洪積台地上に立地する。古墳時代の遺跡は18～21までの野依伊藤田窯跡群、9の弊旗邸古墳などがあげられる。集落は洪積台地上や平野部の微高地に散見される。白鳳時代から奈良時代にかけては、沖代条里、11の長者屋敷遺跡などがあげられる。沖代条里は現在もその景観が残る。中世の遺跡は犬丸川流域遺跡群、諸田遺跡などがあげられる。中世城館は市内に点在する。1587年、秀吉の九州征伐の伴い黒田如水が豊前に入国し中津城を築城する。1600年以降、細川、小笠原氏の時代に城下町が完成されたと思われる。

第２章　沖代地区条里跡原田地区

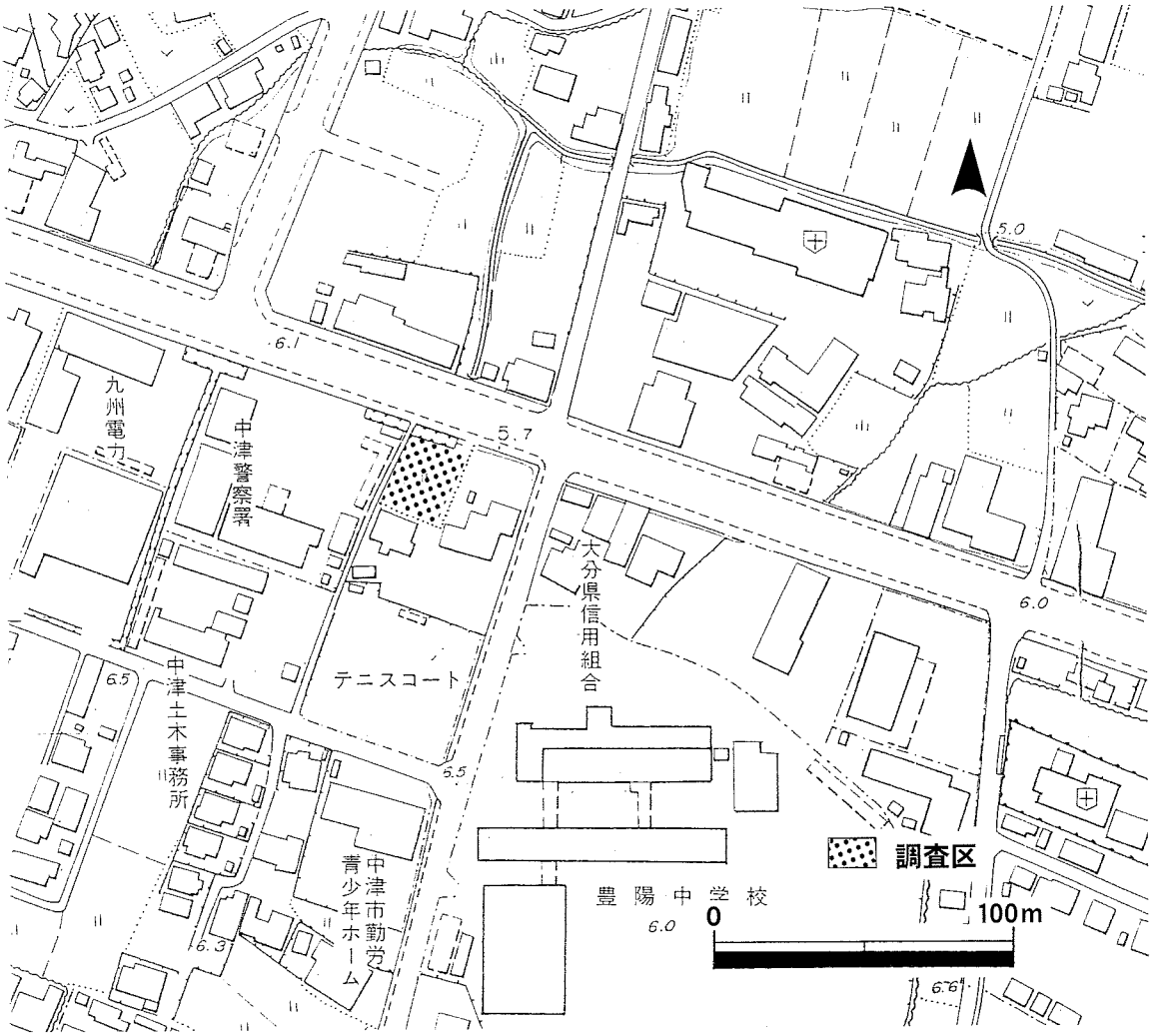


第２図　沖代地区条里跡図

１．調査に至る経緯

沖代地区条里跡は中津市の西側半分をしめる沖代平野に広がる。古代より施行された条里跡は現在も水田として利用され、方形の地形をたどることができる。しかし近年の開発によりその姿は消されつつある。中津市教育委員会では平成7年度より国庫補助により開発に対する発掘調査を行ってきた。ここで今回までの調査を概観してみる。平成7年度の調査区（市木地区）では古墳時代の水田に伴う水路が確認された。同年度調査区（小倉地区）（高田地区）では中世の遺物が確認された。平成8年度調査区（居屋敷地区）古墳時代の竪穴住居1基、溝1条などが検出された。

今年度、条里内において民間開発による発掘調査が行われることとなった。調査区は平成7年度調査区（小倉地区）の北側約300m程に位置する。



第3図　沖代地区条里跡原田地区周辺図

2．調査の概要

調査区に2本トレンチを設定し、重機により掘削を行った。表土より20cm程は白灰色の砂利層、その下層約50cmは20～30cm程の礫を含む褐色土層である。ここまでは近年に埋められたものである。その下層約20cmは暗褐色の土層で近年まで畑地として利用されていたものである。これより下層は黄灰色の地山となる（第5図）。この面より溝状遺構、畦と思われる遺構を検出した。

溝状遺構

2トレンチより溝状遺構を検出した。溝は幅約40cm、深さ約5cm程である。ほぼ直線的で埋土は褐色土層の粘質土である（第5図）。出土遺物はなく時期は不明である。

畦

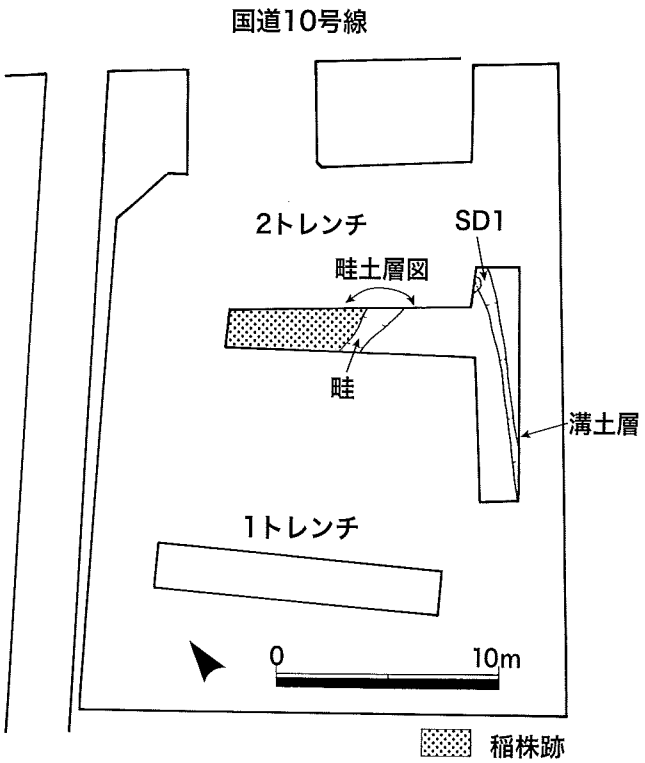
2トレンチで畦となると思われる遺構を検出した。幅約70cm、5cm程の礫が交った土が詰め込ま

れた状態であった。これより西側の地山では直系5cm程の黒色小円孔が検出された。稲株の跡とおもわれる。

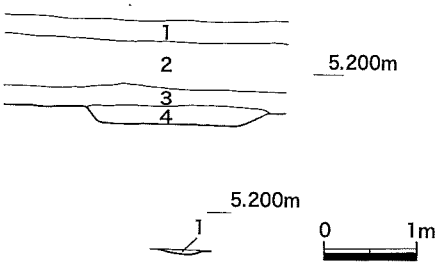
3. 小　結

今回の調査で検出された溝状遺構と畦は、ほぼ直行するもので、一つの水田の区画になるものと思われる。地山直上より近世の遺物が僅かであるが検出されることからこの時代のものと思われる。開発による地下への影響はなく本調査の必要はないものと判断し調査を終了した。

〈参考文献〉
中津市文化財調査報告 第18集
「沖代地区条里跡（Ⅱ）福島遺跡東入垣地区（Ⅱ）」
中津市教育委員会 1997



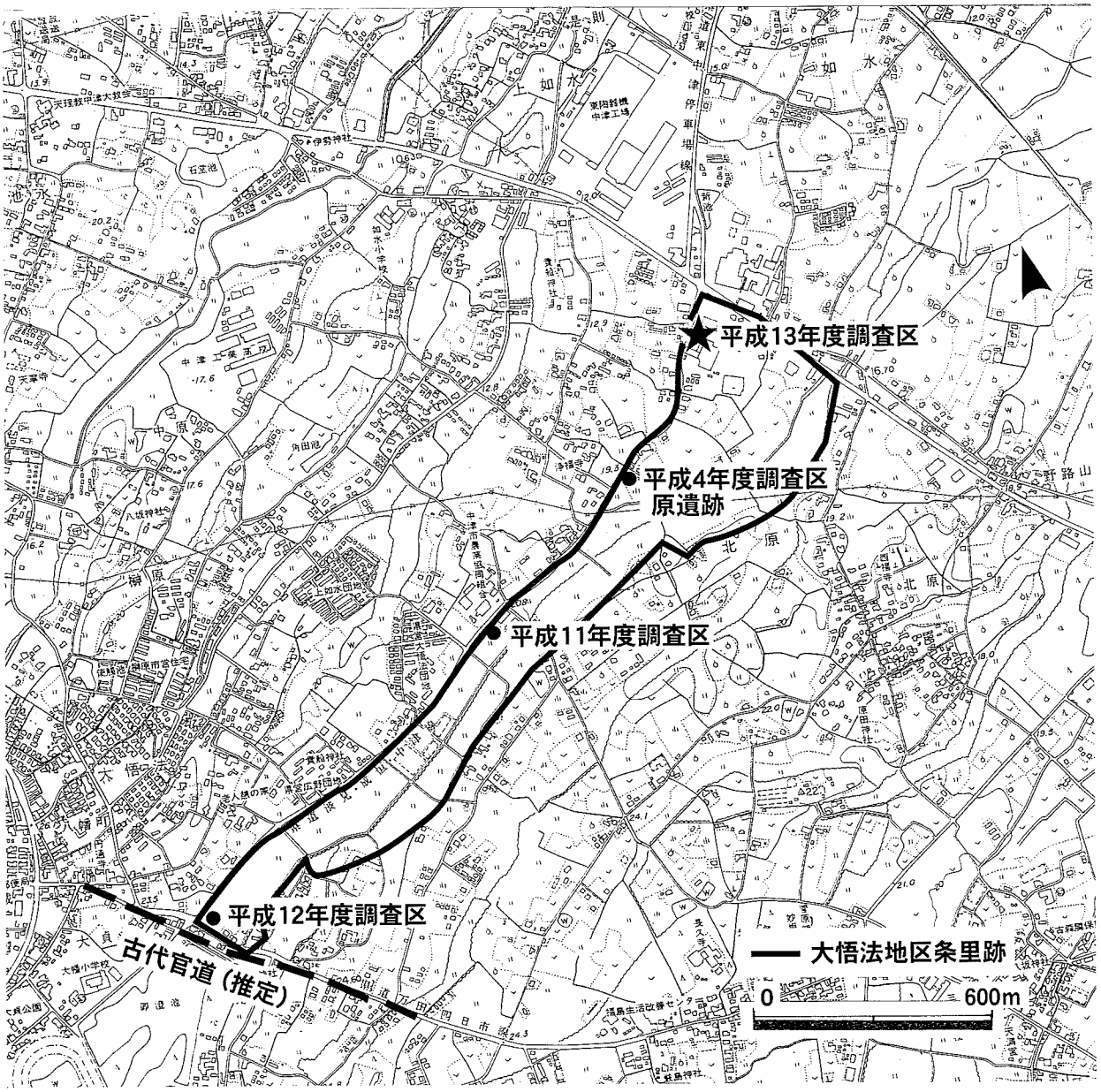
第４図　トレンチ配置図



第５図　畦、溝、土層図

写真１　畦、土層

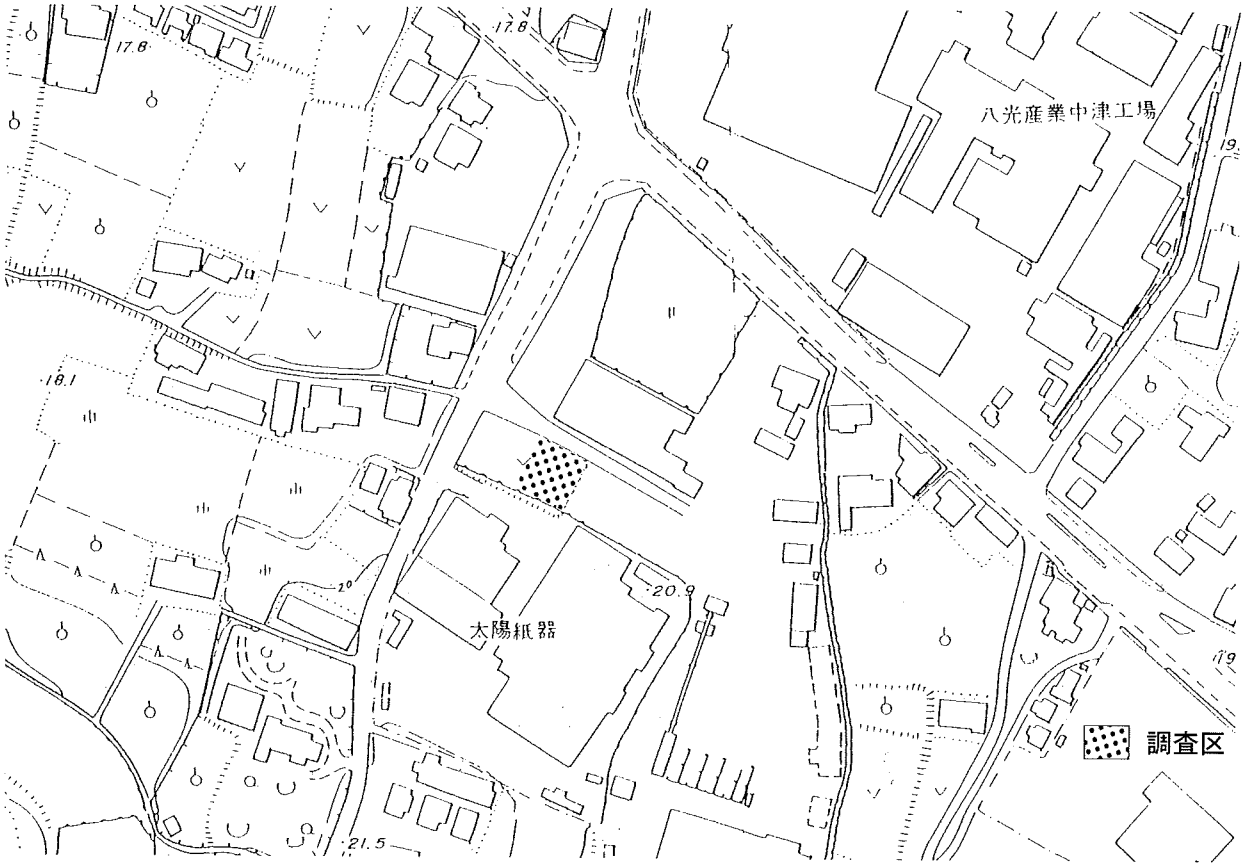
第3章　大悟法地区条里跡堀田地区



第６図　大悟法地区条里跡周辺図

１．調査に至る経緯

大悟法条里は中津市の中央部、標高20m程の洪積大地に位置する。南限を古代官道（推定）に北限を現在の旧国道10号線に位置する。面積は約500,000㎡程で、平成12年度までに条里内において3ケ所が発掘調査された。平成4年度、民間開発による発掘調査で、古墳時代の竪穴住居4基、掘建柱建物3棟などが検出され原遺跡として周知された。また平成11年度、平成12年度にも民間開発による試掘調査が実施された。平成11年度の調査では近世のものと思われる溝を1条、平成12年度では中世以前と思われる溝が１条検出された。いずれも開発が遺構面まで達しない事から、本調査



第７図　大悟法地区条里跡堀田地区周辺図

には至らなかった。今年度も条里内において民間開発が行われることになり、試掘調査を実施することとなった。調査地点は原遺跡より北西に50m程の地点で条里内において乾燥した微高地である。調査前は古代の集落の広がりが想われた。

２．調査の概要

調査区の面積は200㎡の狭い畑地である。耕作された跡から僅かに土師質土器片と思われる遺物が散見された。調査区全体に、トレンチを設定し重機により２本のトレンチを掘削した。１トレンチは幅２m、長さ６m程。２トレンチは『L』字状に幅２m長さ７m程である。表土より10cm程掘り下げた。褐色の耕作土である。これより下層は黄褐色のしまった地山である。一部２m程掘り下げたが遺構、遺物は検出できなかった。

３．小　結

今回の調査で、遺跡は検出されなかった。当地は周辺の状況から削平されたものと思われる。埋めもどして調査を終了した。

第４章　中津城本丸南西石垣

１．中津築城の歴史

中津城は市の最北端、福岡県との県境を形成する山国川の河口沿いに立地する。川と海に面した要衝の地であり、堀の水かさは潮の干満で上下する。二重の堀を有し、外堀には通称「おかこい山」と呼ばれる土塁をめぐらせていた。

そもそもこの地を選定したのは黒田孝高であった。1587年（天正15）、豊臣秀吉は九州をその支配下に繰り入れ、豊前国下毛郡など六郡の領主として自らの軍奉行であった黒田勘兵衛孝高を配した。黒田氏ははじめ、大塚山の砦を修築して根拠地としていたが、天正16年中津江太郎の居城であった丸山城を修補し、入城した。享保の人である奥村甘斉「閑居草庵記」によると、「城はかきあげばかりで松などがうえてあった。」程度であり、城郭、櫓などの修補にも古材木を使った証しの貫穴などがあったという。「黒田如水縄張図」（註1）に描かれている城は現在の扇形と異なり方形である。本丸、二の丸、三の丸とともに「京町」、「博多町」、「町」（4ケ所）、「侍屋敷或町屋」、「寺モアリ」と記されている。

写真２　本丸南西石垣、堀遠景

1600年（慶長5）、黒田氏の福岡転封に伴い、豊前一国と豊後国国東、速見郡の領主として細川忠興が任じられ、当初中津が居城となった。忠興は翌年居城を小倉に移し、中津には忠利を入れた。1602年（慶長7）小倉城の造営工事を行い、翌年から1620年（元和6）まで中津城の増改築を行う。まず三の丸から着手したらしく、現在は確認できないが、中津城三の丸西門の石垣には、慶長12年9月という文字が刻まれていたという。材木は三光村八面山から切り出し、山国川対岸の小隈（雄熊）日隈（姫熊）に散在した古墳の石組みを壊して石垣に使用したとされる。

1615年（元和元）の「一国一城令」に際して、忠興は中津城の普請を中止するように伝えている。1616年（元和2）中津城の残置が決まる。1620年（元和6）、忠興は忠利に家督を譲り三斎と号し中津城にはいった。三斎の隠居城として修復、完成をみた中津城には本丸、二の丸、三の丸と八門、二二の櫓が設けられた。城全体の地形も方形から扇形になった。城下への入り口には番所がおかれ、城下町の町割りも行われた。武家屋敷は、三の丸に家老屋敷、片端、殿町に上級武士、金谷片には下級武士の屋敷がおかれた。また相原に大井堰を築き、導水路を掘って山国川の水を城内にひいた。1632年（寛永9）、細川氏の熊本転封によって、中津には譜代大名小笠原長次が入部した。城下町の整備も行われ、1652年（承応元）には、石樋を城下にうめ、山国川の水を川上でとり、城下へ水を流すという、九州最初の水道の設備が行われている。小笠原時代、城下町は瓦葺きに整備され、さらに拡大した。

1717年（享保2）譜代大名奥平昌成が中津に入り、以後1671年（明治4）年まで奥平氏が中津藩主となった。

1870年（明治3）廃城を願いで翌年城は取り壊された。1863年（文久3）には本丸下壇の西側に「松の御殿」を新築している。この御殿は1871年（明治4）の廃藩置県後は、旧藩庁の残務取り扱い所となり、さらに小倉県中津支所庁として利用されたが、1877年（明治10）増田宋太郎らが襲撃し、火を放ち、松の御殿は消失した。その後中津城本丸跡は中津公園地となり、堀は埋められ、今は薬研掘が水をたたえるのみである。

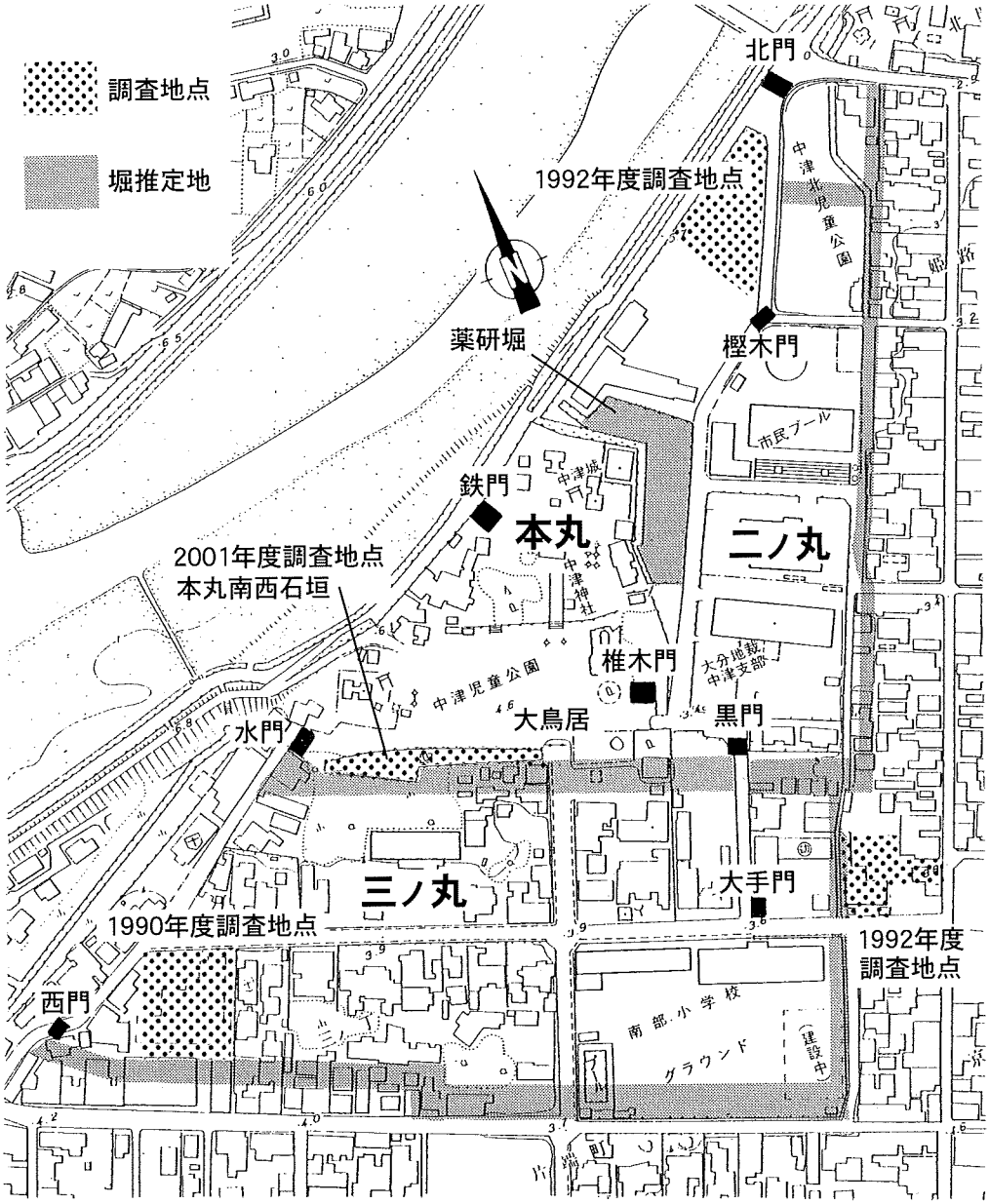
註1）　中津市歴史民俗資料館蔵をはじめ、同様のものが5点確認されている。

〈参考文献〉　「中津市史」中津市史刊行会 1965
黒屋直房「中津藩史」碧雲社 1940

2．中津城の現況

現在の天守閣は1964年（昭和39）に建てられた鉄筋コンクリート製である。黒田氏時代に天守閣が存在したかどうか議論がわかれている。1694年（元禄7）貝原益軒の「豊国紀行」にも「城は町の北海辺に在て天守なし」とあり、天守閣はなかったという根拠となっている。しかし、細川家文書の「綿考輯録」（元和2～9）には、「本丸と二の丸の間の堀を埋め、本丸と二の丸を一つにした建物を築き、天守の台（天守閣）をとりおろした」という記載がある。

本丸跡周囲は、往時の石垣が比較的よく残されている。天守、薬研掘周辺は一定の整備がなされ、本丸跡西側の石垣は、鉄門跡を石積みで塞いでいるほかは、昔の状態で残っている。石材は花崗岩



第８図　中津城本丸付近地形図（S＝1/3500）

が主体。また椎木門跡周辺、本丸北側、西側の山国川沿いには福岡県大平村の神籠石（註2）と目される直方体の石が多数転用されているのが確認できる。

本丸と三の丸との間の石垣はこれらにくらべるとハラミや欠落が多いが、低い場所ほど当時の状態が維持されている。本丸南西石垣は現況では総延長約140m。地表からの高さは約3.2mであるが、堀は道路面まで埋められており、道路面より上の部分が露出しているにすぎない。また、本丸南西石垣の東にある大鳥居にむかう道路は後世に石垣を破壊し造られたものである。本来道路をはさんで黒門まで石垣は連続しており、総延長約220mの石垣と堀が存在していたが、東側部分は戦後新制中学校建設の際に崩して平地にした。地下には石垣の下半分が残存している。

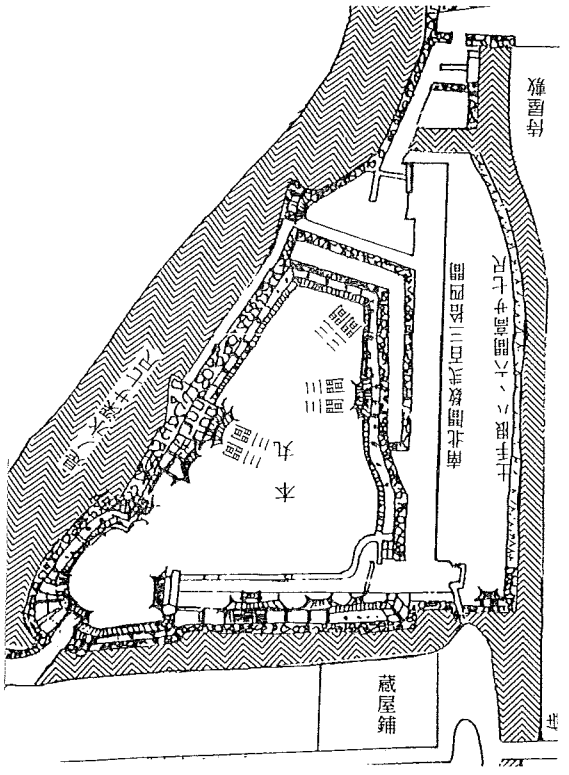
註２）　1999年福岡県大平村で発見された「唐原神籠石」。中津城の川上にあたる。

3．調査に至る経緯

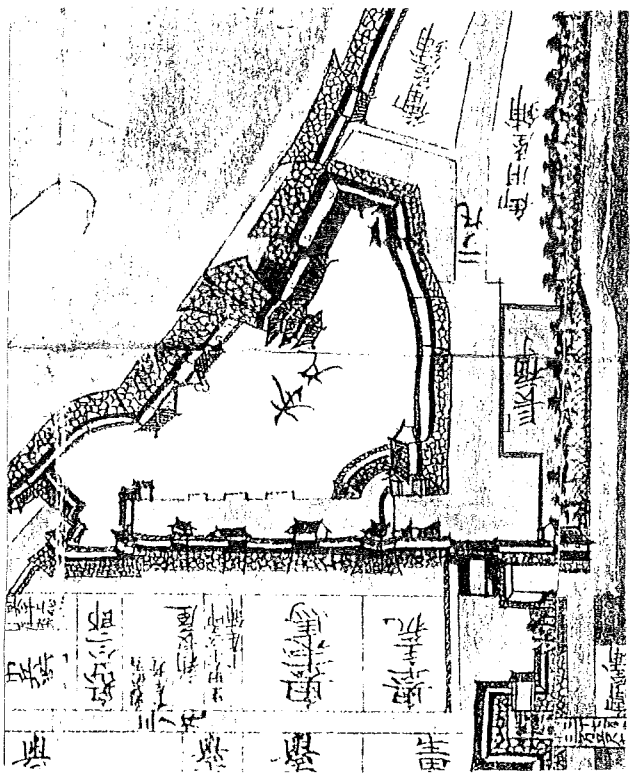
過去、中津城及び城下町で何度か発掘調査が行われてきた。1988年、マンション建設に伴い西門近くの通称「おかこい山」という土塁の調査を実施した。1990年には図書館建設のため、旧中津市庁舎跡で発掘を行い、藩校進修館跡を検出した。1992年には二の丸で樫ノ木門跡の調査を行った。京町の道路では工事中に御水道の溜枡と辻井戸が見つかっている。1994年（平成6）大手門前の旧御用屋敷跡（南部公民館）発掘調査の際、城下町側の石垣下から松材の胴木が検出された。調査区内からは黒田氏の時代まで遡れる遺物が出土している。また、武家屋敷跡の殿町では1997～1999年にかけて県道拡幅工事の際、発掘調査が行われ、建物跡や多くの土坑から大量の陶磁器が検出された。しかしこれまで、中津城本丸内では発掘調査が行われたことはない。

1992年、中津市では中津城内堀の復元について事業計画の検討を行った。1993年、「中津城保存整備計画（案）」が承認された。2001年、中津市都市計画課により本丸と三の丸との境の堀、及び石垣の復元工事が４ヵ年計画でスタートした。計画は石垣の痛んだ部分を解体、復元し、道路をはさんだ東側にも石垣を築き、堀を掘り上げ水を流し城を本来の形に近付けようとするものである。今年度は大鳥居から西側の石垣の痛んだ部分を解体、修復する工事が行われることとなった。石垣解体に先立ち、大鳥居から西側の、石垣が鍵の手状に屈曲した部分まで石垣沿いの堀を掘り上げ、根石まで検出する作業が行われた。石垣はほぼ６分の勾配を持ち、高さ約6.7m、法長約7.8mで、緩やかな輪取りが認められた。

第9図の「中津城総曲輪絵図」（註3）は寛文3年（1663）のもので、第10図の「中津城下町絵図」（註4）は幕末のものである。現在大鳥居に続く道路は第9図では「蔵屋敷」の左側、第10図では



第９図　『中津城総曲輪絵図』部分



第10図　『中津城下町絵図』部分

「奥平求馬」家と「奥平主税」家の間を通る。どちらの絵図にも本丸南の石垣上には白壁の塀が連なり、いくつかの櫓が描かれている。しかし、絵図では石垣を前面から描くため、石垣の内側である本丸側の様子がどのようなものであったか不明である。

石垣解体工事を機会に、石垣天端面の櫓をはじめとする建物遺構の確認と、石垣内側の遺構確認調査を行い、今後の整備に役立てる資料を得ることとした。

註３）中津藩史料叢書「中津藩　歴史と風土」第四輯付図
中津藩政史料刊行会 1983
註４）中津市内　吉本家所蔵

〈参考文献〉
中津市文化財調査報告第9集「おかこい山」中津市教育委員会 1990
中津市文化財調査報告第21集「京町　御用屋敷跡」中津市教育委員会 1998

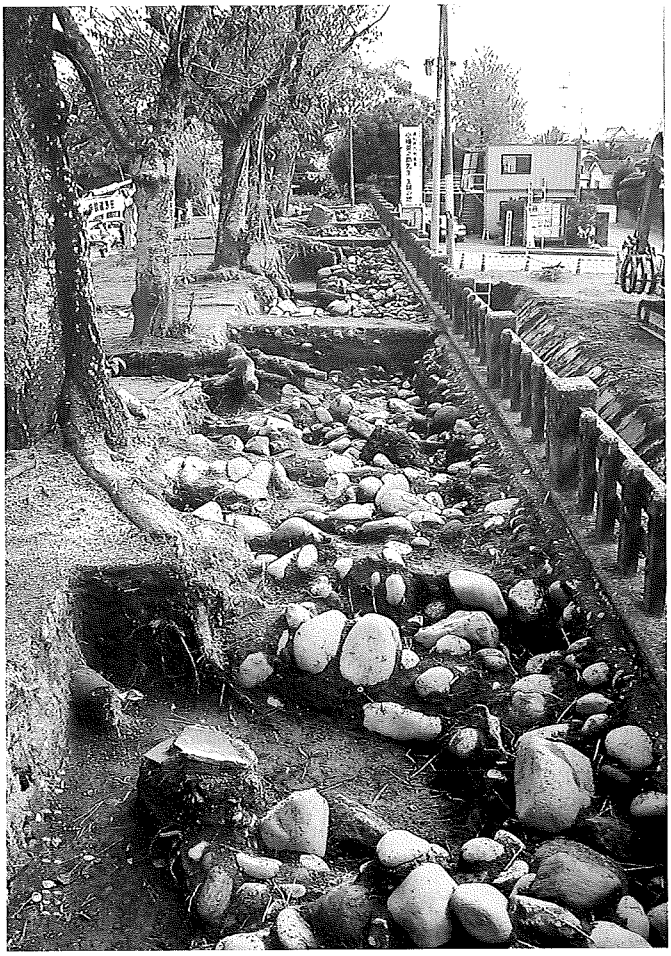


写真３　石垣裏込め石検出状況（東から西を望む）

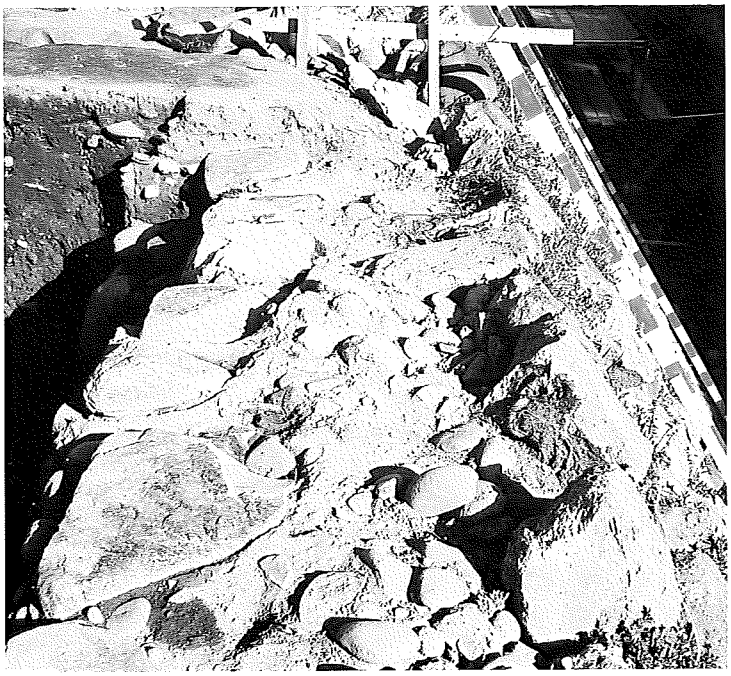


写真４　塀基礎石検出状況（東から西を望む）

４．調査の概要

(1) 現況

総延長約140mの範囲で残る本丸南西石垣は大鳥居側から西へ約64mで鍵状に屈曲し水門へ続く。天端の幅は大鳥居側では約4.5m。本丸側の面は石垣がほぼ直立して築かれるが、石積みの様子から近代のものと観察できる。天端のほぼ中央には、昭和５年の忠魂碑が建立されており、本丸側に忠魂碑に登るコンクリート製階段が取り付けられている。忠魂碑

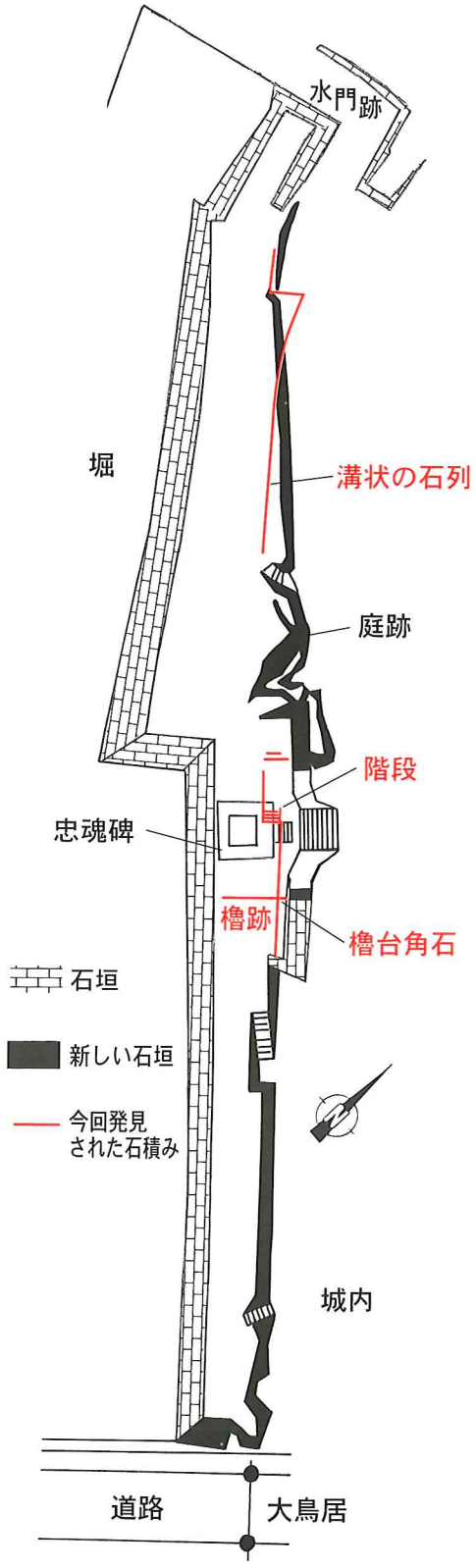
を境に西側は天端の幅が広がり、本丸側に膨らみをみせる。丸い玉石を使用した石積みが複雑につまれ、多数の木が植えられている。石垣上には戦前民家が建てられており、複雑な石積みや多くの樹木はその民家の庭の一部であったとの聞き取りを得る事ができた。またコンクリート製の防空壕も造られていた。

(2) 天端面の調査

大鳥居側から西へ約40mの範囲では７本の試掘トレンチを石垣に直行する形でいれた(写真3)。しかし、堀側石垣の裏込め幅が広く、また本丸側の新しい石積みの裏込めもあること、この範囲内には桜の木が何本も植えられていることなどから、実際に調査できる面積は限られ、十分な調査成果は得られなかった。

大鳥居から西へ40～64mの範囲内では、樹木が少なく天端の幅も広いこと、調査途中で忠魂碑が撤去されたことから、調査が比較的行い

写真５　旧石列検出状況（東から西を望む）



第11図　調査区全景（S＝1/700）

やすかった。この範囲内では大量の瓦が出土し、古い石垣を検出するなど、大きな成果をあげることができた(写真5、第11図)。堀の石垣沿いには径30～55cmほどの扁平な石が間隔をあけずならんでいた(写真4)。絵図に描かれている白壁の塀の基礎であろう。

写真６　櫓跡石積み（東から西を望む）

忠魂碑周辺では最上面に火災層があり、大量の瓦が堆積していた。礎石などの建物遺構は検出できなかったが、石垣上に建っていた最終段階の建物が火災で焼け落ちたままの状態を示すと思われる。

堆積した瓦の層を除去すると、次々と古い石列があらわれた。まず忠魂碑東側では20cm掘り下げたところから櫓跡と思われる石積み（写真6）が表れた。径30～70cmほどの石を使用しており、西北角に角石が確認できた。櫓台の西北角の角石は現在の本丸側石垣より1.9m内側にあり、後に本丸側に張り出させて作り直した状態が観察できた。櫓台にとりつくように天端面から約1.1m下で長軸約70cmほどの石を使用した石列が西へのびていた(写真6)。この石列は櫓台の西北角から約7.5m西で堀側に約1.7m屈曲し、また西へのびる。石列の上面は平らに面がそろっており、本来の天端であることがわかる。現在確認できる櫓台の上面からは段差があるが、土層観察の結果、櫓台は東西方向の石列と同じ高さの状態から、後にかさ上げし、さらに本丸側に継ぎ足すという、二段階の補修を経ていることがわかった。この東西方向の石列の前面からは近代のガラス片が出土しており、石列前面はかなり新しい時期に天端面をひろげるためパックされたものと判明した。

写真７　階段遺構（北から南を望む）

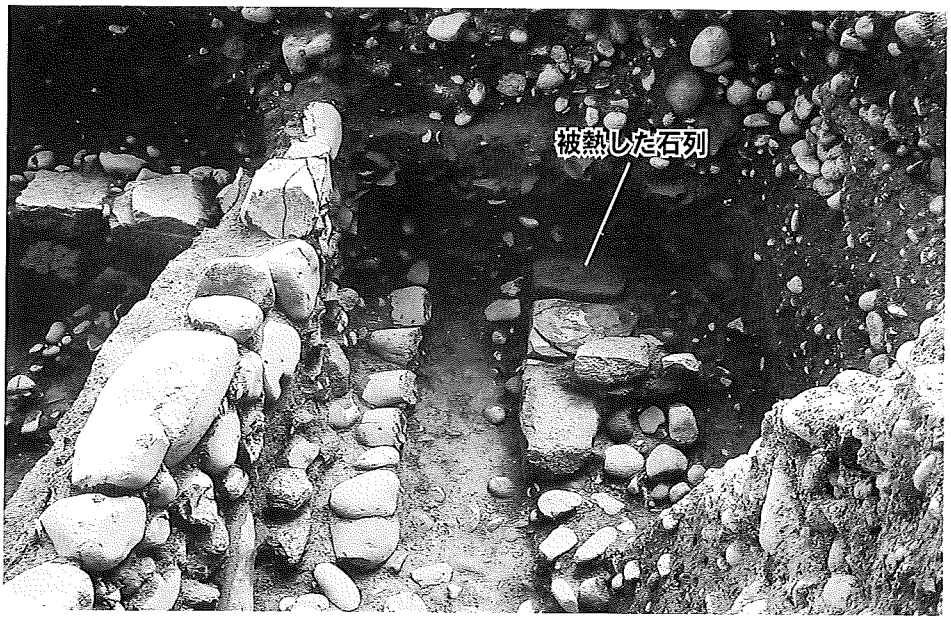


写真８　天端上　溝状遺構（北から南を望む）

写真９　石垣内側の溝（東から西を望む）

また、この東西方向の石列が堀側に屈曲した部分には階段が設置されていた（写真7）。西から東へ石垣にそうように階段を登り石垣の天端に到達するようになっている。途中、４段までを検出したところで作業は中断している。階段の幅は約120cm、段差は約30～40cm。最上段には板碑が転用されていた。板碑は高さ70cm、幅約28cmで、額部と身部の間に段差はなく、二条の沈線が刻まれたのみの簡単なものである。この階段も後に本丸側を石垣でパックされている。

東西方向の石列は、櫓跡から西へ約14mで堀に直行する新しい石積みに寸断される。その西側には、天端より約1.7m下がった地点に堀に直行する南北方向の石列が検出された（写真8）。天端からかなり低いにもかかわらず、赤く被熱しており、石の上には焼土層が覆っていた。このことは、石の面が地表面に露出していた時期に火災にあったことを示唆している。使用された石は古い様相を呈しており、櫓台から西へのびてきた石列と形状が似ていることから同時期と考えられる。砂岩の石列

が平行し溝状を呈すため、当初土塁上の廃水施設のようなものととらえ、堀の方へ水を落とす仕組みを想定したが、石材が違うことから検討を要する。

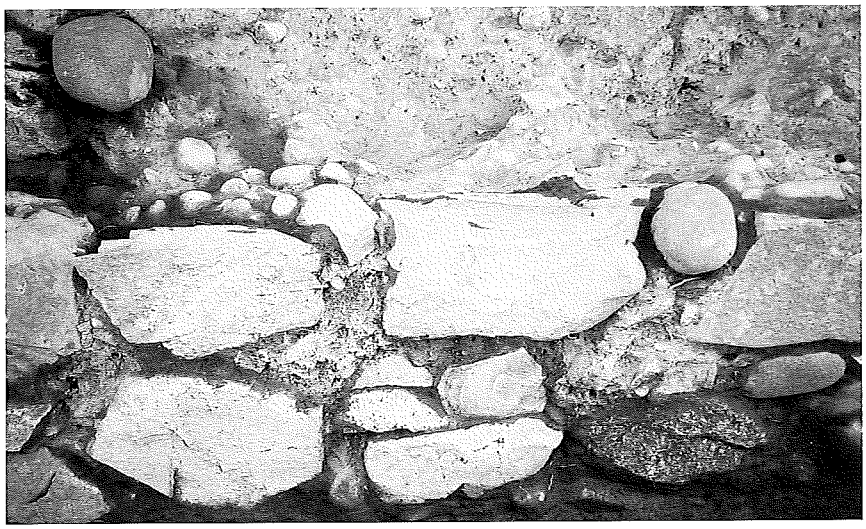


写真10　溝状石積み正面

(3) 石垣内側の調査

石垣内側は、現在後世の造作になる石垣が築かれている。特に忠魂碑に上がる階段西側から水門にかけては、玉石を簡単に積み上げた極めて軟弱な石垣である。コンクリート製階段西側の、樹木に覆われた庭跡部分を除き、その先から水門までの石垣を除去したところ、やや内側から石列が検出された。現地表面とほぼ同じレベルで、石列は二条平行し溝を形成していた(写真9)。溝の石垣側の石列は二段ほど石がつまれ(写真10)、ほぼ直立する。石の天端がそろっていることから、この上に石垣がつまれていたとは考えにくい。溝の城内側の石列は、一段で石垣側よりやや低い。溝幅は約30cm、溝の深さは約40cmほどである。溝に埋まった土の上層、及び溝より城内側には黒い玉砂利が多数散乱しており、溝の手前は玉砂利で化粧されていたと思われる。絵図では石垣を前面から倒して描くことから、石垣内側の様子はこれまで不明であった。今回の調査で少なくとも水門寄りの石垣内側は、土手状で裾に溝を巡らすつくりであったと考えられる。またこの溝状石列は水門近くで大きく城内側に彎曲し、張り出す。水門からのスムーズな侵入を防ぐ形にも見えるが、彎曲し城内に突出する部分の石列は直線部分と比べ、石が小ぶりで一段のみの簡単なものであることから、本来直線であったものを後に作り替えた結果ではないかと思われる。石垣の土手が、溝の形状通り張り出していたかは現段階では不明である。

写真11　水門側土塁下石列(西から東を望む)

溝状石列の溝下層からは17世紀前半の唐津の溝縁皿が出土し、溝に埋まった土の上層からは17世紀後半の青磁が出土していることから、この溝は17世紀前半までに造られたものと考えられる。また水門近くで溝状石列裏の土手にトレンチを入れてみたところ（写真11）、石列が据えられた整地層下には炭層があり瓦が散在していた。ゆえに溝状石列は最古段階のものではない。最下層の瓦は黒田段階に遡れる可能性があり、細川段階に土手を作り直したのではないだろうか。土手の土層観察の結果、最低二度の作り直しが認められる。

5．まとめ

調査の結果、本丸南西石垣の天端及び城内側の本来の形が見えてきた。と同時に、新たな問題も浮上してきた。まず旧天端高は現在の天端より約１m低かったことが判明した。堀側から石垣を見た際も、天端近くの石積みは石も小さく、下方にくらべると乱れが大きい。やはり、その部分だけ、後世にかさ上げした結果であろう。このため、城内側を旧天端高にあわせて復元すると、堀側石垣と大きな段差が生じてしまう。天端の仕上げをどうするか、早急に結論を出さなければいけない問題である。さらに石垣の内側が、忠魂碑付近では石垣、水門寄りでは土手状の可能性が高く、食い違いが見られる。時期差に起因するものなのか、櫓付近のみ厳重に造られたためなのかを見極めねばならない。この点については、出土遺物の検討、土層観察をはじめとして、さらなる調査を進めていく必要がある。最終的に調査結果をもとにし、どの時代に焦点をあわせ、復元していくのかを検討しなければならない。

今回石垣復元工事に伴い、本丸南西石垣の一部を根石まで掘り下げたところ、一部積みなおされているものの築城当初の天正期の状態を留めたものであることが判明した。中津城は近世城郭としては九州最古のものの一つである。石垣は加工していない野面石を使用した穴太積みで、天正期の石垣が広範囲にわたり目の当たりにできるのは全国的に見てもほとんど例がないという。また、根石まで掘り下げる際、堀の下層から金箔を施した鬼瓦の一部が出土した。信長の死後、秀吉は諸国の子飼いの大名の居城に金箔瓦の使用を許可した。秀吉没後は使用は急激に減少しており、中津城の金箔瓦は黒田氏の居城に使用されていたと思われ、中津城の歴史を彩るものである。

どの都市にも近世城郭があるわけではなく、それゆえ中津城は城下町中津のシンボルたりえてきた。しかし、中津市民の中で、中津城の価値はどれほどのものであっただろうか。「江戸時代からの建物が残っていない。石垣が壊れかけている。堀はほとんど埋められている。地方の小さなお城。」そのようなマイナスイメージを抱く人も多い。行政の中で文化財に携わる我々には「九州最古の近世城郭。有力武将の居城。天正時代の石垣を広範囲に残す希少な城。」として広く市民に知らしめる義務がある。このような評価をいただいた城郭は、市民の誇れる財産であり、復元工事のメスを入れる決断をした中津市の責任は重い。今後慎重調査と歴史認識をふまえた復元工事に最大限努力しなければならない。

図版1　沖代地区条里跡原田地区

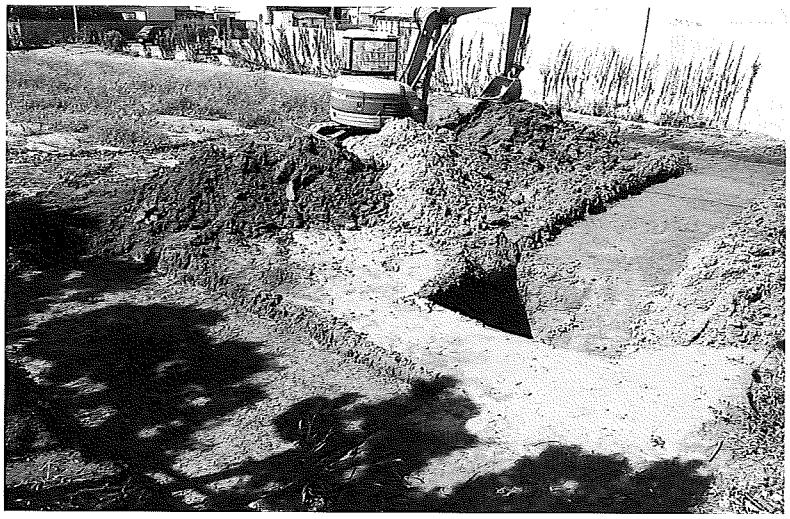
発掘風景

トレンチ状況

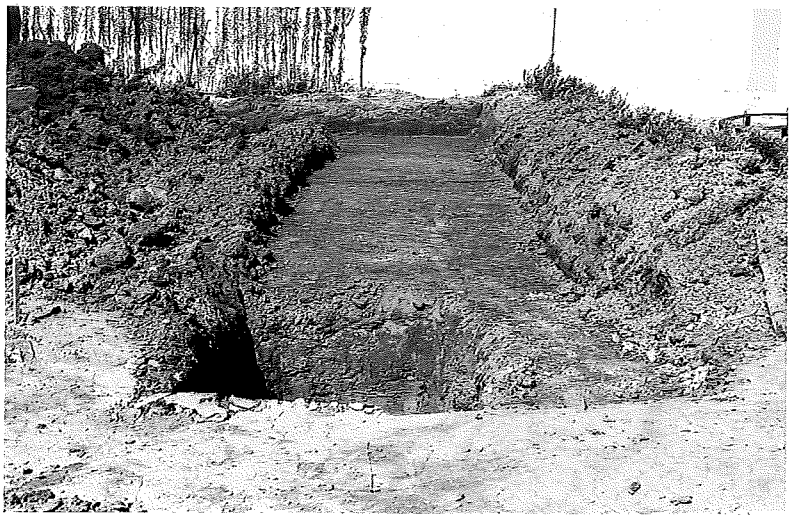
稲株跡

図版２　大悟法地区条里跡堀田地区

発掘風景



トレンチ状況



トレンチ状況

報告書抄録

書名	沖代地区条里跡原田地区（おきだいちくじょうりあとはらだちく） 大悟法地区条里跡堀田地区（だいごぼうちくじょうりあとほったちく） 中津城本丸南西石垣（なかつじょうほんまるなんせいいしがき）
副書名	2001年度中津地区遺跡群発掘調査概報
巻次	（XIV）
シリーズ名	中津市文化財報告
シリーズ番号	第27集
編集者名	高崎　章子　　花崎　　徹
編集機関	中津市教育委員会
所在地	大分県中津市豊田町14-3
発行年月日	2002年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
沖代地区条里跡原田地区	大分県中津市中央町1丁目157-1	44203	101007	33°35′26″	131°11′44″	2001 1003 ～ 2001 1010	493㎡	アパート建設
大悟法地区条里跡堀田地区	大分県中津市大字上如水1337-1	44203	101031	33°34′32″	131°14′11″	2001 0910 ～ 2001 0911	200㎡	鉄塔建設
中津城	大分県中津市1278-1	44203	101001	33°36′10″	131°11′16″	2001 1101 ～ 2002 0329	814㎡	保存整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沖代地区条里跡原田地区	水田		溝		
大悟法地区条里跡堀田地区					
中津城	近世城郭	江戸時代	石垣	瓦、陶磁器	

沖代地区条里跡原田地区
大悟法地区条里跡堀田地区
中 津 城 本 丸 南 西 石 垣

2001年度 中津地区遺跡群発掘調査概報
中津市文化財調査報告　第27集

2002年３月31日

発行　中津市教育委員会
印刷　㈱川原田印刷社